

令和8年度 第1回白馬高等学校学校運営協議会 議事録(概要)

1 日 時 令和7年(2026年)4月27日(月) 13時30分～15時00分

2 場 所 白馬高校会議室

3 出席者 委員14名 以下敬称略

- ・武田彰代(大町市立美麻小中学校講師 元白馬村教育委員長)
- ・太田伸子(白馬村議会議長)
- ・柴田友造(小谷村議会副議長)
- ・笹川陽子(めぞん・ど・さがわ)
- ・松澤忠明(前PTA会長)
- ・白戸 洋(松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科教授)
- ・篠崎元嗣(白馬村立白馬中学校)
- ・小林かおる(小谷村立中学校長)
- ・丸山俊郎(白馬村長)
- ・中村義明(小谷村長)
- ・北村幸治(白馬山麓事務組合事務局長)
- ・石川順三(白馬高等学校長)

欠席委員

- ・相沢さつき(同窓会副会長)
- ・草本朋子(白馬インターナショナルスクール理事長)

その他の出席者

- ・井出敦(高校教育課高校再編推進室室長)
- ・田中聡(高校教育課主幹指導主事)
- ・宮嶋直美(高校教育課主任指導主事)
- ・小谷村教育課長
- ・白馬山麓事務組合白馬高校支援係局長補佐、主査、白馬高校魅力化コーディネーター
- ・白馬高等学校教頭、事務長

4 次 第

(1) 開会の言葉(北村保勝白馬高等学校教頭)

(2) 長野県教育委員会挨拶(井出敦高校再編推進室室長)

○生徒活動のための支援金、公営塾の運営など、白馬村、小谷村の支援により白馬高校の魅力化、特色化を推進することができている。

○普通科、国際観光科それぞれの特色を活かした教育活動を前面に出し、着実に積み重ねている。生徒一人一人がはつらつとしており、本当に良い状態であると思う。

○昨年度は国際観光科10周年の記念式典が行われた。これまで積み重ねてきた教育活動の成果が発表され、白馬高校の魅力や可能性をますます感じられた。こうした取り組みが実を結び、現在は白馬というネームバリューも活かし、県外から多くの中学生や保護者が見学に來たり、説明会に参加したりしていると聞き及んでいる。

○昨年8月、教育委員会で「再編に関する基準等について(改定版)」を公表。白馬高校は中山間地存立校として位置付けられており、これまで「在籍生徒数が160人以下の状態が2年連続した場合」となっていたが、今回の改定を経て「120人」という数字に変更。中山間地存立校の基準に2年連続して抵触した場合にはいずれかの方策を取ることになっているが、この基準は2030年3月を完了目標として推進したもの(第2期再編)。よって、2030年以降の基準については、今後の高校の在り方を検討するワーキンググループを教育委員会内に立ち上げ、適正規模等をこれから議論していく。120人という数字に変わったとは言え、白馬高校の魅力化、特色化には注力していき

いと考えている。

(3) 学校長より挨拶（石川順三白馬高等学校長）

○昨年度の卒業式では44名が旅立ったが、今年は新たに51名の入学生を迎えた。始業式では「常に心のOSのアップデートを図っていこう」と生徒に呼びかけた。

○ホームページを新たに作成。静止画だけでなく動画も活用し、好評である。

○今年度も新しい試みをしていきたいと考えている。

(4) 委員の紹介（略）

(5) 審議事項

＜白戸会長＞

○10年の歩みの中でさまざまな困難があり、先生の努力はもちろんのこと、運営協議会委員や地域の支えがあったからこそ今がある。きっちりとした基盤のあるところで学校運営ができてるのが本当に白馬高校の良いところだと思う。

①学校より現状報告と学校経営方針・組織編成・教育課程についての説明・提案

＜石川校長＞

○P6「1 在籍生徒数推移等」について。令和7年度は165名でスタートしたが、今年度は入学生51名、現在の在籍生徒数は166名。再編基準に関しては落ち着きを取り戻している状態。入学生徒のうち白馬中出身者が20名（昨年比－7）、小谷中6名（昨年比＋1）、県内他地区は3名（昨年比－9）、県外からは19名が入学。特筆するところは51名の入学者中、男子33名、女子18名となり、男子の割合が多いということ。総数に対し白馬中出身者が63名で全体の37%、小谷中が13名、その他が90名となっている。入寮生66名、下宿生7名、計73名（全体の44%）が親元を離れて生活している。

○P7「4 入学者 科別・出身地別内訳」。昨年度に比べ、関西方面の入学者数が減少し、関東圏に集中。県内他地区生の減少も見てとれる。

○P8「5 在籍生徒数」について。現在留学中の生徒が2名（2年と3年に1名ずつ）。今年も3名（デンマーク1名、カナダ2名）が留学予定。転学については、3名が転学、1名が退学となっている。「6 部活動加入状況」は、1年生90.2%、2年生115%、3年生95%である（兼部を含む延べ数）。

○P9「7 寮生・下宿生」について。1部屋に2人ないし3人という中で、人間関係のトラブルが数件ある状況であったが、支援係のサポートもあり、今は収まっている様子。「8 学校説明・相談会等の日程（予定）」は後程、支援係から報告。個人的な肌感覚として、2学期の入学説明会の希望者が多くないのに対し、夏休み前は非常に多いように感じる。地元に対しての学校説明会は定期的に行うことが重要。再三行っていきたい。

○P10「9 今年度の主な取り組み」、「（1）国際観光科 教科横断型授業」として、高校生ホテルを白馬五竜観光協会協力のもと、白馬パークホテルで実施。今年度はインターンシップスタイルのホテル実習と東急ホテル等でのデュアル実習（接遇の実践）を行えるような二段構えで行っていきたい。「（2）観光政策と観光地比較実習」の一環として「観光まちづくり」の授業では、観光地である軽井沢を訪問。今年度も県内の観光地を回りたいと考えている。青鬼地区での紫米づくりにも携わる予定。「観光実務」の授業では、PTA 研修旅行の企画を昨年度同様実施予定。昨年度は「軽井沢コース」と「木曽コース」に分かれ、生徒がバスガイドとなり観光名所を回り、主体的に動く生徒たちを見ることができた。今年度は富山、上越、草津、伊那、駒ヶ根あたりも視野に入れながら企画予定。「（3）DX 活用の推進」については、今年度いよいよ3Dプリンターの活用がスタート。中学校や小学校にもアピールしながら進めていきたい。「（4）国際観光科外部講師授業」については未定。「（5）有志による自主的課外活動プロジェクト」として、昨年同様、地域みらい留学のオンラインで生徒（国際観光科）に出演してもらい、本校の良さをアピールしてもらいたいと考えている。「（6）資格取得」は今年度も引き続き推奨していきたい。「（7）海外留学・海外研修」については、両村の協力のもと、イギリス短期研修を実施。生徒の報告書は山麓事務組合

に提出するとともに、白馬フォーラムあるいは別の機会に紹介したいと考えている。

○P11「10 国際交流」は、五竜観光協会を通じて交流を受け入れている他、今年度も桜美林大学と連携し、短期留学中のテキサス大学の学生と学びを深める機会を設ける。中学校（高槻市立冠中学校や新渡戸文化中学校）の修学旅行受け入れ実習も実施。「11 グローバル講演会」については、生徒がアクティブに活動できるような内容にしていきたい。

○P12「進路決定先」について。昨年度は信大教育学部他、私立大学や専門学校等に進学。今年度は25名が四年制大学、3名が公務員（警察、自衛隊等）希望。卒業後に就職を希望する生徒が減少しているのが現状。一度、村外/県外に進学し、白馬に戻ってきてくれると良いと思う。

○P14～16「学校経営方針」、「校内体制」、「組織編制図」は変更なし。教職員数21名に対し、組織の数が多という指摘もあるが、現状維持。不具合があれば、編成を検討していく。

○P17、18「教育課程表」変更なし。普通科の生徒も国際観光科のカリキュラムを選択できる形になっている。

○P19、20『未来の学校』構築事業について。昨年度『未来の学校』構築事業に採択され、5年間の活動を県に発表する機会を得ている。白馬の学びを整理することがポイントの一つであり、県にも披露していこうと考えている。

○P21、今年度からスタートする「遠隔教育配信事業」について。「遠隔教育配信事業」は本校の他、阿智、阿南、蘇南を含めた4校が実証校となっている。本校では「数学B」と「地学基礎」を手始めに、評価も含め、長野県遠隔教育推進センターの配信者と相談しながら行う予定。「数学B」はより上位の大学に行きたいと考えている生徒向けに、難しい学びもできるような講座を作っていきたい。「地学基礎」は、細かな内容を配信していく予定。文科省でも「ネクストハイスクール事業」を各都道府県に打ち出し、長野県でも先に挙げた4校の他、軽井沢、小海、北部を合わせた7校で更なる遠隔授業を実施する計画がある。採択されれば補助金がつくとともに、新しい遠隔授業や多様なニーズに沿った学びが可能となる。今後も遠隔授業の様子を伝えていければと考えている。

<白戸会長>

○ご意見・ご質問はあるか。

<柴田委員>

○「環境授業」について。地域との関わり合いを持たなければ進められないと思うが、教員が入れ替わりする中で、今後どのように地元を動かしていくのか。

<石川校長>

○どの時期にどんな学びをしていくかを含め、環境授業の大部分を受け持ってくれている先生（非常勤）と相談をしながら引き継いでくれる方を探している状況。複数名の候補者はいるが、詳しくは決まっていない。環境や地政学に精通している人がいれば紹介してほしい。

<丸山委員>

○グローバル講演会について。9月下旬に白馬村の村政施行70周年行事、11月下旬にベストツーリズムビレッジの総会が行われるため、登壇者の人選についてはバランスを見ながら、検討・相談をしてもらえるとありがたい。

<柴田委員>

○3月に実施されたイギリス語学研修はどういう場所に行ったのか。分かる範囲で教えてほしい。

<北村局長>

○イギリスのチュルトナムに14日間滞在。

<笹川委員>

○PTA研修旅行について。毎年保護者として参加しているが、生徒たちが非常に頑張ってガイドをしている。何より参加している保護者が楽しそうなのが良いと思う。今後はもう一歩踏み込んで、プロのガイドの方に入ってもらい、対応の仕方などを学ぶとさらに良いものになると感じる。

<武田委員>

○美麻小中学校はメンドシーノ（カリフォルニア州）と交流があるが、前年度に来日した生徒は高校生が多く、レベルが違ってしまったことがあった。今後、白馬高校と交流することは可能か。その場合、何日前に知らせればよいのか。今年度も6月に来日予定。

<石川校長>

○詳細を教えてもらえれば、可能な限り対応したいと思う。

＜柴田委員＞

○前期・後期試験について。国際観光科の前期試験で「地域枠」のような仕組みはあるのか。

＜石川校長＞

○特に地域枠は設けていない。令和8年度入試で見ると、今までよりも白馬中、小谷中の生徒が入学している。評定値の高い生徒が志願してきている状況も見てとれるため、地域にも国際観光科が認知されているように感じる。今のところ、地域枠がなくても5割程度が地元出身。寮の運営のことを踏まえると、今後も同じような割合を維持できるのが望ましいと思う。

＜太田委員＞

○「普通科でも国際観光科の授業が選択できる」と地元の子に理解してもらってもいいのではないかな。地元の子が普通科を志願するようになれば、その分県外生が国際観光科に入学でき、全体数も増えるのではないかな。学校説明会等で、生徒だけでなく保護者にも認知してもらえよう働きかけをお願いしたい。

＜石川校長＞

○普通科も含め、地元の生徒、保護者に正確に伝えられるように努めたい。

＜松澤委員＞

○カリキュラム関連のことは宣伝するだけでも十分伝わる。小学校、中学校と実際にもっと交流して、分かってもらうのが一番だと思う。

＜白戸会長＞

令和7年度の経営方針および組織編成、教育課程についての承認。

②山麓事務組合より支援事業の内容及び予算についての説明・提案

＜北村局長＞

○P22「令和8年度 白馬山麓事務組合 白馬高校支援体制図」。白馬、小谷両村で白馬高校支援をするものであり、例年からの大きな変更はなし。公営塾の講師（英語）を昨年度6月から1名増員。学生寮に記載された「みなし寮」とは下宿のこと。

○P23「白馬高校支援事業」における予算は、2億15806千円（当初予算ベース）。前年度予算と比較すると108%。要因としては物価の上昇があげられる。支援事業は「公営塾」「学生寮」「全国募集・高校支援」の3つの柱で構成。「公営塾（しろま学舎）」は講師4名で基礎学力の支援、自習学習、進学対策、英検等の資格取得、特進クラスを行っている。「学生寮」については、寮生が66名、舎監2名、下宿生が7名。「全国募集・高校支援」の関する予算としては、派遣職員等人件費、海外研修、各種検定、グローバル講演会、全国募集の推進のための「地域みらい留学」等の負担金・補助金があげられる。

○財源は両村の負担金だけでなく、当初予算ベースで国補（「新しい地方経済・生活環境創生交付金」）30,000千円、県から「長野県高等学校寄宿舎運営費等補助金」として15,600千円と算定。

○P24「しろまパルハウス運営方針」について大きな変更なし。「基本方針」は、共同生活を通じて「自立心や協調性を育みながら人間的な成長を促すこと」を目指している。「管理体制」の欄に、施設の定員数（男子寮20名、大下寮12名、女子寮26名）を記載。過去、寮運営を始める前に、部屋の広さを踏まえた上で一部屋2～3名での運営を目指してきたが、実際には男子寮32名、大下寮8名、女子寮26名が入寮。全国から志願者が集まるのは非常にありがたいが、寮は一部屋あたり常時3名となり、食堂や学習スペース等の共用スペースも非常に手狭になってきている。朝食や夕食など、時間で動くことの多い中で共有スペースが狭いとなると、提供する側のオペレーションも変わってくる。人員を増やす等の対応をせざるを得ない。

○寮・みなし寮連絡会として月1回、寮および学校で定期的な実施。

○P25「入寮者の出身地別」を見ると、令和8年度入寮者数が73名、香川県から宮城県まで広範囲に及ぶ。人口分布で見ると、関東圏、愛知県、長野県周辺の県が多い傾向。県内出身者で特徴的なのは、比較的南信出身の生徒が多く見られること。

○P26「新入生の入寮状況」は令和7年度32名に対し今年は22名。男女比は男子14名（73%）、女子6名（27%）であり、男子に偏っている。

○P27「令和8年度 生徒募集活動年間スケジュール」について。5月に地域みらい留学のオンラ

イン説明会、6月に独自開催として東京で説明会を行う。進路を検討するにあたり、比較的早い段階で進路決定、情報収集をする傾向にあるため、なるべく早い段階で生徒募集を進めたいと考えている。9月以降は学校説明会や地域みらい留学のオンライン説明会を実施予定だが、生徒募集の状況や感触、入学状況を鑑みながらスケジュールを決定していく。

<白戸会長>

○ご質問・ご意見はあるか。

<笹川委員>

○寮の定員数における課題がある中で、今後、寮や下宿先を新たに増やす方向でいくのか、あるいは増築という方法が望ましいのか。もし地域で協力できることが具体的にあれば教えてほしい。

<北村局長>

○建築資材等の価格も上がっている状況を考えると、増築等は難しい。下宿先を増やしていければと考えているが、食事提供や体調不良時の対応（病院への付き添い）など大きな負担となるため、下宿先もなかなか見つからない状況。

○高校支援事業予算の4分の3近くを学生寮の運営に費やしている。縮減する方法も打ち出せず、現在は男子寮、大下寮、女子寮の3棟で運営を行っているため効率的とも言えない。増築・改築するのは難しいが、圧縮することを検討するのであれば、ソフト・ハード面で考えていく必要があると思う。

<中村委員>

○白馬高校をモデル事業のような形で進めてきたことの成果が出ている。それに対し、県にも評価をしてもらいたい。県で予算を出す、あるいは寮を建てるなどの支援があってもよいのではないか。実際に他の地域での事例もある。生徒募集をしていくにあたり、今後、裏付けがないと動けなくなり、白馬、小谷から新たに予算を持ち出さなくてはならないことにもなり得る。その辺りのことを県にも認識してもらいたい。

<白戸会長>

○全国募集を行っている隠岐島前高校（島根）は、単に高校を存続させるのが目的ではなく、島根県全体としての人口政策、特に若い人の定住・移住を図ることを重要視していた。若い世代を今つかまえられるかどうかが未来の人口政策を左右すると言われている。ぜひ県もそういった側面で考えてほしい。

<柴田委員>

○国際観光科の開設時、「新たに寮を建設することはできない」というところからスタートしている。今後は、県も一緒になって考えてほしいと思う。来年度、新たに入寮者が増えることを考えると、物理的に無理となる可能性もある。他所には、開閉式の扉で区切り、一つの寮内で男女を分けて管理する寮もあり、今後はそうした検討もしていく必要があるように思う。過去、寮生が問題を起こすケースもあった経緯を考えると、あまり寮は分散しない方がいいのではと思う。

○公営塾に関して。地元の中학생対象に、夏休み等を利用し学習塾体験を開催してもよいのでは。

<北村局長>

○塾長と相談しながら、検討したい。

<白戸会長>

○両村にとって、白馬高校が存在する意味を深めていく時期にあると思う。小さい頃からの教育がその子の進路を変えていくことを考えると、中学生にアプローチをしていくことが必要。同時に、卒業生が将来、何らかの形で白馬に返してくれる、という仕組みづくりを考えていくことも必要もある。

白馬山麓事務組合支援事業の内容及び予算についての承認。

(6) 意見交換

<武田委員>

○高校に「魅力ある先生がいる」というのも大事。人事に関して、運営協議会で要望を出すことは可能なのか。

<井出敦高校再編推進室室長>

○具体的にどんな人材がほしいのかを学校を通じて、人事異動の際に希望を出してもらうことは可能であると思う。

＜武田委員＞

○今年度は、どんな先生が必要なのかを話し合っていきたいと思う。

○白馬高校は先生同士の交流が活発で、一人の生徒に対していろいろな先生が関わり、大切にしてくれる学校だと思う。そこをもっとアピールしていければと思う。

○D Xの活用はぜひ小学生とも交流を進めてもらいたい。動かしながら学ぶことを子どもたちに体験してほしい。

＜石川校長＞

○多くの教員が職員室でやりとりを行い、生徒対応についてどうすべきかを細やかに話し合っている。生徒支援は、本校の自慢できるところであると思う。

○環境や観光に特化した教員を確保するのは難しい。外部人材の存在も必要となり、さまざまな人の手を借りながら学校活動に取り組んでいる。どういう人材が必要かを見定めながら、要望を出していきたい。

○小・中・高の連携は今後もテーマになってくる。教員間の交流含め、どうやって子どもに還元できるかを合わせて進めていきたい。

＜武田委員＞

○美麻の場合は、スクールパートナーズという形で、地域の人に子どもたちの成長に関わってもらっている。白馬村にも何かに特化している人たちが多いと思うので、スクールパートナーとして協力を求めるのもよいと思う。

＜白戸会長＞

○自分自身が関わってきたさまざまな実踏を踏まえて思うのは、「学校が変わって地域が変わるのではなく、地域が変わるから学校が変わる」ということ。白馬、小谷共にここ数年元気になってきている気がする。国際観光科を開設した際、10年先を見越して動き始めたが、そろそろ次の10年を考えていく時期。新しい取り組みを実践していく必要もある。

○10年を通して変わっていないのは、生徒の面倒を見る先生の想いや姿。そこが基本にあるから、いろいろなことをしたときに生きてくるのだと思う。

(7) その他

＜中澤事務長＞

○中間改修工事について。本校舎が対象(特別等は含まない)。令和6年度に設計、8月ごろに着手、約3分の1が終了。「寒い」「暗い」などの意見が生徒からもあがったため、外観よりも内装を中心に行っている。例えばトイレの様式化、モップでふけるような床材、鏡の個数を増やすなど。寒さ対策として断熱に優れたものやFFヒーターを導入。内装の色合いは、生徒会の生徒の意見も参考に、淡いトーンで統一。今年度中に工事が終了予定。

＜田中聡主幹指導主事＞

○生徒の学びや活動に対し、具体的なアドバイスが出ており、活発な議論であると感じた。このようなやりとりの中で、白馬高校の魅力化が出来上がっていったのだろうと思う。困難や課題がある状況で、一つ一つをブラッシュアップするような発言があり、ありがたいと感じている。

(8) 閉会の言葉

以上、第1回学校運営協議会は終了。

第2回は7月4日(しろま祭りの開催中)、第3回を11月、第4回を2月に予定。